

ペルセポリスを見る②

今日のペルセポリス・ツアーのメンバーは、運転手・ガイド2人・客8人。ドイツのベルリンから来たという女性は、「スカーフをするのがうっとうしい」とかいいながら、ペルシア語が完全にわかるようです。いろいろ話を聞いてみると、実は両親はイラン人で、彼女が3歳のときに革命が起こり、ドイツに亡命したとのこと。今回は母親を連れて「里帰り」というわけです。「でも私は歴史のことは、よくわからないの。あなたのほうが、詳しくそうね」

コージくんという日本人のバックパッカーも飛び入りで参加。大学生活最後の夏、中東を放浪しているそうです。春休みにインドを放浪し、今回はイランからトルコへ向かう予定だとか。イランに来て、はじめて日本人に会いました。あとはイラン人家族が二組。私とコージくんは女性の英語ガイドがついて、残りの人たちには男性のペルシア語ガイドがつくことになりました。



▲ ザグロス山脈が見えてきました。山はすべて、はげ山です。

朝から強烈な日差しです。空気が乾いているので汗はすぐに乾き、のどはカラカラ。ミネラルウォーターを何本も飲み干します。「半日ツアー」の意味がわかりました。一日外にいたら、ミイラになるでしょう。車はシーラーズの街を出て、北に向かいます。途中、**ナグシェ=ロスタム**という、もう一つの有名な遺跡に立ち寄ります。

ナグシェ=ロスタムとは、「ロスタムの絵」。**ロスタム**は、イラン版『古事記』である『**シャー=ナーメ(王の書)**』に出てくる最大の英雄。ギリシア神話のアキレウス、インド神話のクリシュナ、日本神話のヤマトタケルみたいな人物ですが、この遺跡にある騎士の浮き彫りが、ロスタム像と誤解されてきたのです。実はここは、アケメネス朝の王墓であり、ササン朝の聖地でもあったのです。アケメネス朝がギリシアのアレクサンドロス大王に滅ぼされてから500年後、イラン民族の復興を掲げて独立したのがササン朝です。ですから、アケメネス朝の王墓は、ササン朝の聖地となるわけです。



▲ ナグシェ=ロスタムが見えてきました。体が震えます。ああ、来て良かった。

断崖に4基の王墓。ペルセポリスを建設した**ダレイオス1世**とその子孫たちの墓です。アケメネス朝の初代**キュロス大王**の墓は、さらに数十キロ北方のバサルガダエという場所にあり、石棺の形をしています。2代目の**カンビュセス2世**の墓は未発見ですが、カンビュセス墓の石材の一部が、2006年にバサルガダエで見つかっています。3代目のダレイオスが、なぜバサルガダエから遠いこの地に、しかも自然の断崖を刻むというまったく新しい様式の墓を作らせたのか？ これが実は、アケメネス朝の最大の謎であるダレイオスの即位と関わっているのです。



▲ キュロス大王の墓(パサルガダエ)。この写真は Wikipedia からお借りしました。

キュロスの子はカンビュセスですが、カンビュセスとダレイオスは「遠い親戚」ということになっています。ギリシア人歴史家**ヘロドトス**によれば、暴君であったカンビュセスは実の弟スメルディスを殺し、エジプト遠征を強行。本国では、死んだはずの弟スメルディスを名乗る人物が謀反むほんを起こし、鎮圧に向かったカンビュセスは、乗馬中に自分の刀が足に刺さるという事故で急死。偽スメルディスを倒したダレイオスが王位についたという話。

しかし、ダレイオス即位のあと、帝国各地に反乱が起こり、ダレイオスはカンビュセスの妹と結婚して正統性を示しています。このことから、実はダレイオスが殺したスメルディスは「本物」で、**謀反人はダレイオスのほうじゃなかったのか**という疑惑があるのです。天智天皇が死んだあと、その皇子を自死に追いやって即位した天武天皇が、天智の娘(持統天皇)を皇后にして正統性を示したのと似たような話です。後ろめたいことがあるヤツほど、自分は偉いんだ、と誇示したがるものです。



▲ ダレイオス1世の墓。4本の柱の上に、「玉座かつぎ」の浮き彫り。

ダレイオス一世の墓の前まで来ました。はしごがないと登れません。4本の柱に飾られた王墓の上段に、「玉座かつぎ」の浮き彫りがあります。各属州の臣民に支えられるダレイオス。最上部左側がダレイオス、右側が**ゾロアスター教**の「聖なる火」。両者の上に、王権を示す「有翼日輪」(翼のついた太陽)があります。このデザインはダレイオスが好んだもので、ペルセポリスにもたくさんあります。



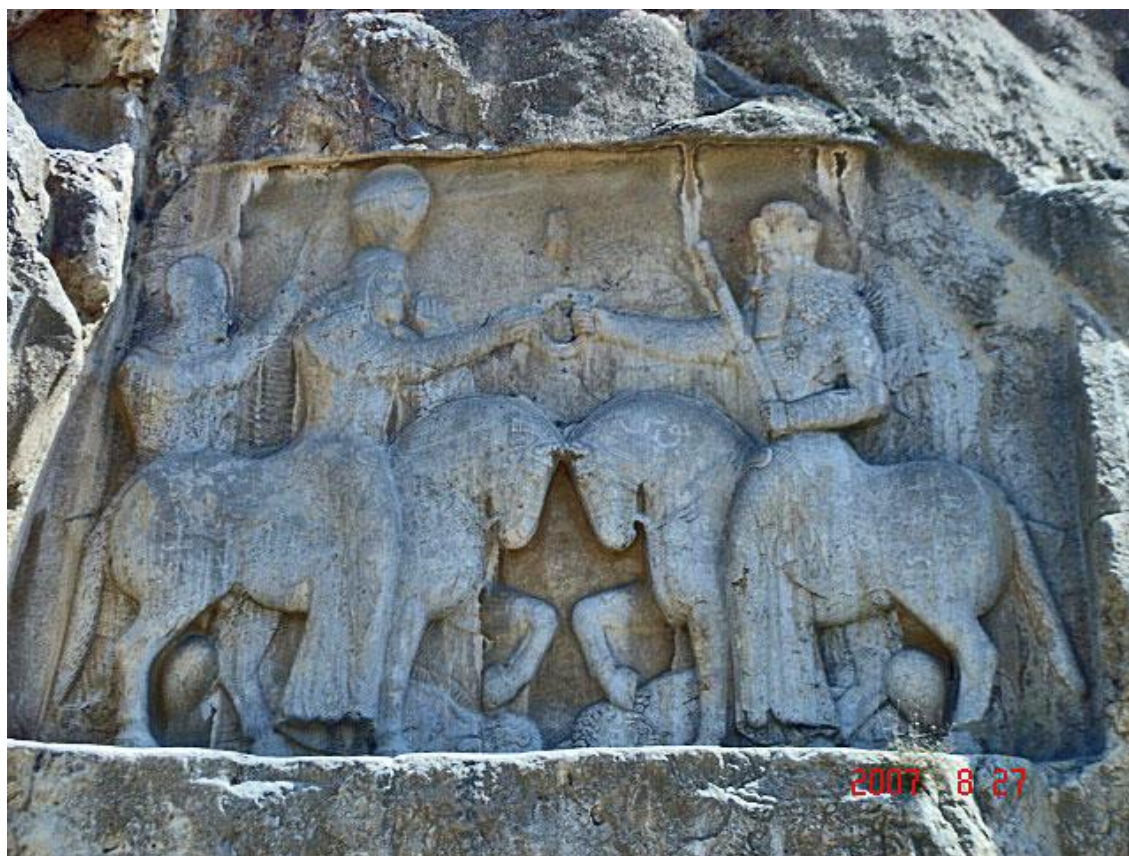
▲ 王墓と向き合うゾロアスター教神殿。この中で、「聖なる火」が燃やされていたらしい。



▲ ゾロアスター教の納骨墓。

火や大地を汚すことを嫌うゾロアスター教徒は、火葬も土葬もできなかったため、遺体を鳥に食べさせて遺骨だけにし、この穴に納めました。これは王墓ではなくて、一般庶民のための墓です、とガイド氏の説明。この鳥葬の習慣は、ダレイオスの頃にはなかったようです。この穴も、あとから掘られたものでしょう。今回は行けなかったのですが、ヤズドという街には今でもゾロアスター教徒が住んでいて、郊外には「沈黙の塔」と呼ばれる鳥葬のための場所があります。現在では、鳥葬は禁止されています。

さて A10メートル以上の高さに彫られたアケメネス朝の王墓の下に、ササン朝時代の浮き彫りがずらっと並んでいます。



▲ アルデシール1世の叙任図。

ササン朝は、ギリシア軍による長い占領時代のあとに生まれた王朝ですから、その文化にはギリシアの影響が見られます。その一つが、神の姿を人間のように表わす、という習慣です。この浮き彫りはその典型で、「**アフラ=マズダ神に王権を授与されるアルデシール1世の図**」なのですが、説明を聞かないと、どっちが神で、どっちが王さまかわかりません。

ガイド氏の説明。

「右がアフラ=マズダ神で、踏まれているのがアーリマン神。左がアルデシール1世で、踏まれているのはササン朝最後の王です。手渡しているのは王権を示すリングですね」

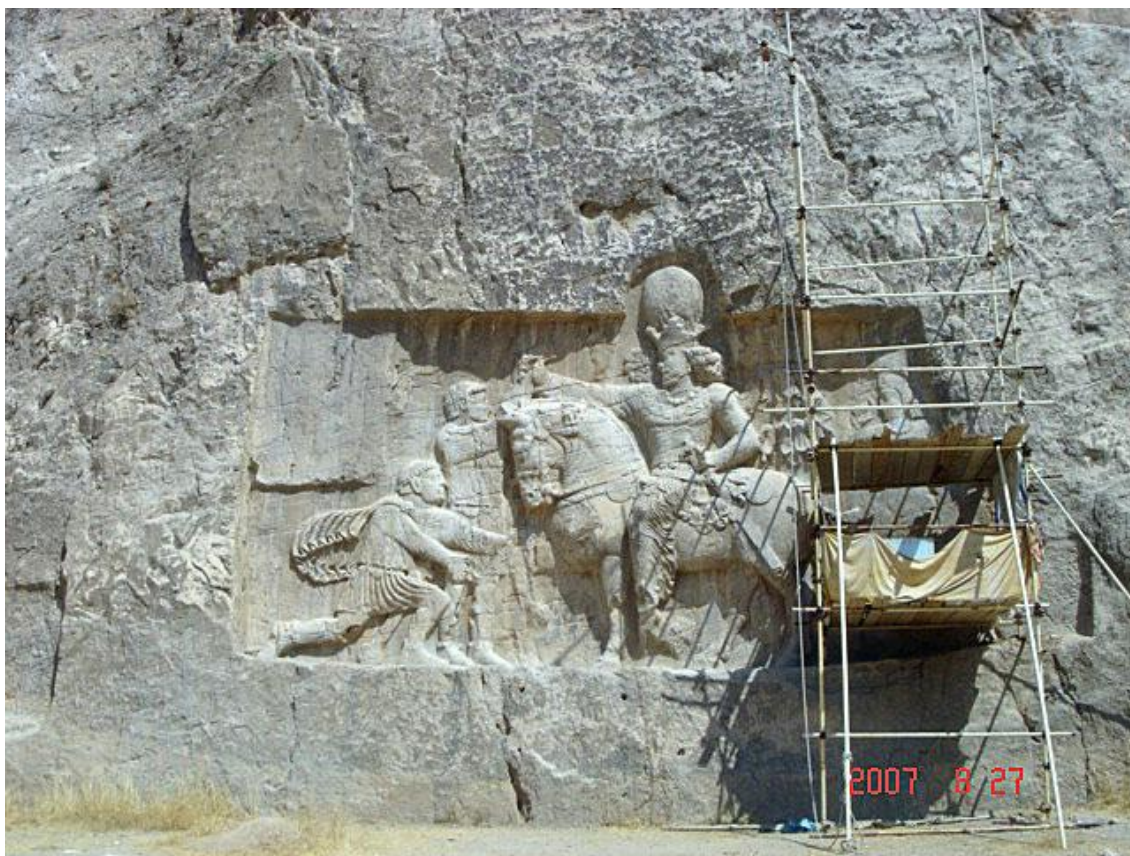
「ちょっと待って、**アルデシールはササン朝の初代国王**ですよ。踏まれているのはパルティア最後の王じゃないんですか？」

「ええーっと…ちょっと待ってください」

コージくんは、「もう、どうでもいいから、日陰に行こうよ～」という顔をしています。私は引きません。あわてたガイド氏、携帯で(もう一人のガイドに?)電話。それからガイドブックをごそごそ調べ始めます。いやな客だと思ったろうなあ。でも、世界遺産のガイドが、ウソを教えてもらっては困ります。しばらくたって、

「あっ、わかりました。踏まれているのは、アシュカニアン最後の王アルタバヌスです」
「アシュカニアンって、パルティアのことですね」
「その通り！」

アシュカニアンってのはペルシア語で**アルサケス朝**のこと。ローマ人は「**パルティア**」、中国人は「**安息**」と呼びました。ササン朝の前の王朝で、完全にギリシア化したイラン人の王朝です。これを、イラン国粋主義のササン朝が滅ぼしたのです。ササン朝は、ローマ帝国とも互角に戦い、ついにはローマ皇帝を生け捕りにするという快挙を成し遂げました。



▲ シャープール1世戦勝記念図。

260年のエデッサの戦いです。**ローマ皇帝ヴァレリアヌス**が、北方のアルメニア王と結んでササン朝に侵攻、敗北。馬上の人物がササン朝第2代の**シャープール1世**、手首を捕まれているのはローマ皇帝ヴァレリアヌス、ひざまずいて許しを乞うのが、244年の戦いで敗れたもう一人のローマ皇帝フィリップス。シャープールは、和平交渉の席でヴァレリアヌスを捕えて奴隷とし、馬に乗るときの踏み台代わりに使ったとか。降伏した数万のローマ兵も、奴隷として使役されました。ササン朝の王たちは、騎馬戦図が大のお気に入りだったようです。これを見るためだけでも、イランに来

たかひがあった、と思いました。「ところであの補修用の足場、どうかしてくれない？」と聞くと、「無理です」とガイド氏。



▲ 作業員のおじさんと。おじさんも、暑さでぐったり…



▲ ガイド氏と。彼女は実は、フランス文学専攻だそうで…いじめてごめんね。

このあと車はさらに北上して、ペルセポリスへ向かいます。

(070909 更新)